

未来を展望する若者座談会

【参加者】朝輝千明（豊能三島B）・井上みなみ（幼年P）・梅山和也（泉州B）・窪田浩尚（中河内B）
 笹田哲平（中河内B）・宮本千絵（泉州B）

【司会】日名大悟（中河内B）

はじめに

日名（司会）：

今日は、ご参加ありがとうございます。大阪支部 40 周年の時も座談会しまして、朝輝さんと窪田さんはそこでも出演されていましたが、今日のこの座談会も後々、読み返していただいて、「若い時、こんなこと考えていたんだなあ」と振り返るものになればと思っています。

まずは、毎日忙しい中でも、体育同志会に 5 年～15 年と足を運んで学習されたり、原稿を書いたりされてきた皆さんが、どういう繋がり・ルートで、どういう思いで入られたのかをお聞きしたいと思います。

次に、その繋がりも踏まえての教育・保育実践のお話をいただきたいと思います。

三つ目には、「この分野、研究不足あるんじゃないか」とお感じになってこられている部分があるのかと思いますので、今後 50 年に向けての大阪支部へのメッセージという意味もこめて遠慮なく話していただきたいと思います。

そのこととも関わって、四つ目には、支部への要望を話していただきたいと思います。

1. 自己紹介

窪田：

今年で 14 年目になりますが、一番最初の学校で中河内ブロックの本郷先生と学年を組んだのがきっかけだったことを覚えています。



そのころは、5 年生だったんで、民舞で御神楽しようと、でも南中ソーランもしようとなって、9 月の運動会に向けて、民舞を二つとかなりヘビーでした。6 月ぐらいから御神楽を始めて、9 月の一週目ぐらいに南中ソーランを必死こいて踊りました。その時に太鼓を教してもらって、たたけるようになりまして、そういう形で体育同志会とは出会いました。学習会にも誘われて、中河内ブロックで日名さんとも出会って、その直後に支部大会をしたことも覚えています。もう 13 年になると思います。

朝輝：

13 年前の 1 月に教育実習行くことになって、その学校でブロック委員会も行われていて、そのブロック委員会で楠橋さんとも出会いました。その学校での例会で、牧野さんや日名さんとも出会いました。（移動中のため、グループラインより）



井上：

大阪総合福祉専門学校という保育士養成校での講師が塩田先生で、夏休み前の体育の授業で「同志会の全国大会があるんじゃないか？」という宣伝を受けて、私と、出水君と、他二人と四人で一緒に奈良大会へ行ったのが同志会との出会いでした。



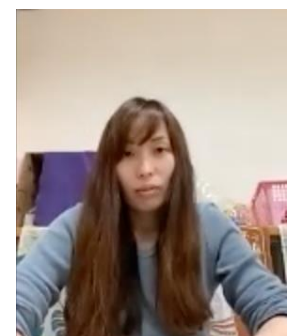
当時、学生が行ける研修があまりなかったので、体を動かすことも好きだったので行って、研修の内容はあんまり覚えてないんですけど、大レクが印象的でした。学校の先生がこんなことになるんやと思って、ちゃんとオンとオフがあって、すごいなと思いながら、入会しました。

今年で保育士歴 14 年になりますが、同志会歴は 15 年目になるのかな。長くおる割に、やっと最近いろんなことが分かってきたかな、という現状です。

宮本：

私は同志会に三つの出会いがあって、一つ目は幼少期でした。おとんに連れられて、「ゆきん子」で参加したり、ブロック委員会や例会について行ってめっちゃ暇していました。

二つ目は、高校生の時に南中ソーランを学校で踊ることになって、泉州ブロックが民舞教室でやってたので、そこで教えてもらって、そのまま自分が踊り



担当で教えに行くことになりました。

そして、教師になって、当たり前のように同志会に入ったという感じです。

日名：

スキーといえば、今年の大阪支部 50 周年企画で市川愛華さんが安武さんとスキー企画を考えてくださっていました。新型コロナウイルスの影響で中止となりましたが、宮本さんは小さい頃はスキーフェスティバルで市川さんとかと出会っているんですか？

宮本：

全く覚えてないですね。4歳の時に「ゆきん子」でやってたので、大きいお兄ちゃんお姉ちゃんとは関わりがなくて、次は4年ほど空いてから参加したので、その時はおられなかったように思います。安武さんの息子さん娘さんには出会っています。

笹田：

僕は皆さんより教師生活のスタートが遅くて、社会人を2年やってから2017年が初任やったんですけど、その年の秋に初任授業研が控えて、体育の授業ということも決まっていたんです。



マット運動ということだけは決まっていたんですけど、教師なりたてで何をしようか分からなくて、誰に聞いていいのか。というところもあって、ネットで体育の研究会とかセミナーをいろいろ探していたら、2017年の支部大会を見つけて、ちょうどマット運動もあったので、飛び込みで行ってみたというのが出会いになります。

そこで、安武さんの分科会で、側転とかお話しとか、ねこちゃん体操とか初めて知って、「これは面白そうや」と思っている話を聞いたりしました。笹田さんが大会で確か基調提案をされていたと思います。その笹田さんが東大阪に勤められているのを知って、同じ東大阪にこんなすごい人がいるんやと思って、縁を感じて、これはもう会に入って深く学んでみようかなと思って声をかけたのが佐々木さんでした。佐々木さんにも「すぐ入ってくれ」と、「今入ってくれたらたのスポ2冊あげるよ」と言ってもらい、その日に入会したのを覚えています。

そこから3年目なんですけど、今でもはっきり覚えています。帰りに、渡瀬さんに岸和田駅まで車で送ってもらったことも覚えています。車の中で、「バスケットはなんでできたか知ってるか？」みたいなうんちくをしゃべってもらいました。僕がバスケやってたから、そんな話になったんやと

思います。面白い人いてはるなーと思いました。

日名：

安武さんのマット運動が面白かったとおっしゃっていましたが、特にこれがビビッときた、というものはありますか？

笹田：

側転を段階的というか、系統的に、分析して、こうしていったらできていくというのが、自分の中で「これは面白い」というふうに、すごいなーというようにも感じていました。

日名：

笹田さん、そこで基調提案されたとの話ありましたが、覚えておられますか？

笹田：

覚えていますよ！具体的な話は忘れましたが、基調提案したことと、笹田さんが入会されたことは覚えています。あの時もブロック長やっただけで、話しかけに行きました。笹田さんから先に声をかけてくれたんとちゃうかなと思います。

日名：

梅山さん、参加ありがとうございます。ちょうど梅山さんの出番やなど話していたところです。よろしくお願いします。

梅山：

僕は初任校で中川豊先生に、出会ったのが最初です。ただ、その時は、中川さんが同志会に入っているのは知ってたんですが、僕自身がまだ大学生気分が抜けなくて、



「休みの日に学習会ってなんか、ちょっとあれやなあ。。。」という感じで、何度か誘われてたんですが、休みの日までは。。と後ろ向きで、断っていたんです。

そうこうしているうちに、一年二年経ったところで、クラスでしんどくなる時に、一番授業づくりで分からへんなというのが体育やって、教科書もないので、どうしても周りがドッチボールいいんちゃうかという感じだったので、ドッチボールやったらクラスでもめたりして、中々一時間ちゃんと体育の授業をやったということがなかったんです。

そんなこんなで、悩んでいる時に、2011年に泉州で支部大会があって、中川さんから「体育で悩んでいるんやったら、実行委員したらどう？」と誘っていただいて、実行委員が何のことやら全く分からなかったんですが、なんでか分からないけどOKを出してしまって、参加したんです。

行った事もないので、分科会ってなんやということから始まって、その時は楠橋さんが陸上の田植え走を教えていただいたのをすごく覚えていて、それがすごく面白かったんですよ。

「あ、これが体育なんや」

て、なんか時間はかかりそうやけど、これやったら、初任の時のただ単に50m走らせて終わりだったのとは違って、その測定の意味を付けてあげたら子どもたちも楽しく取り組んでくれそうやなあと思いました。

その泉州大会の打ち上げで、牧野さんが体操芸をしてはって、雰囲気的にも面白いなあと感じて、その時に僕が「入ります」ということで、発言したのを覚えています。

日名：

ありがとうございます。先程の井上さんも、全国大会の大レクでの先生方の姿に驚いて、それがいいなと思って入会の後押しとなったとおっしゃっていましたが、チャーミングというか、人間らしいというか、真面目な部分と面白い部分があるというのが同志会らしさなのかなと、皆さんのお話を聞かせていただいて感じました。

2. 思い出の実践

日名：

皆さんからもうすでに話が出ましたが、やはり体育の授業どうする、という部分が大きな興味関心ごとという事でした。そして、こうして長年、さまざまな例会に足を運ばれて、日々の実践に向かわれてこられたわけですが、その中で手応えのあるような「この実践！」という授業のお話を、次にしていただきたいと思います。



朝輝：(移動中のため、日名がグループ LINE に掲載された内容を代読)

小学校4年生のリレー実践。最後の授業で全チームがベストタイムを出して、感動の実践となりました(リレーの典型実践について、日名が解説)。

その1ヶ月後、フラッグフットボールの実践に入りました。上手い子がワンマンプレーで得点、そしてめめる。勝利至上主義だし、苦手な子は苦手で終わる。結局うまい子ばかりがボールを持つ。こうして、最悪の終わりを迎えた。スポーツによって工夫をしないとあかんなど実感した。特に球技は難しいなと思った。

窪田：

ここしばらくで、「窪田は健康教育やってるんやな」というイメージがついたのかなと、自分の中

でも思っています。ちょうど、コロナ実践集が出ますけれど、今から10年ほど前に新型インフルエンザが流行った時の健康教育実践もその実践集へあげました。

今思い返すととても恥ずかしいですが、でも10年前に流行ったインフルエンザと同じようなことが今コロナで起きてて、あの頃も、子どもたちが「雇った人を責めるのはおかしい」ということをちゃんと見抜いていたのは、昔も今も変わらないんだなと、こんなんやっててんなあと思いつながら、実践記録を久しぶりに見直していました。

コロナの本にのるので、また買ってください。

それと、淡路島の全国大会に行った時に大津さんの原発の実践報告があって、そこで僕も実践報告したんですが、参加されていた宮城の矢部智恵子さんに報告後、

「窪田さんの実践は、子どもの姿が見えない。子どもの生活が見えないよ。」と辛く切っていただきました。

そこから、実践を通して子どもがどういうふうに変わっていったのかとか、その実践前後で子どもの生活がどう変わったのかとか、そういうことを自分の中で意識していかないといけないと思うようになりました。

その分科会の時に感じたのは、宮城の考えていることと大阪の考えていることは、目指すべきゴールは一緒だけど、アプローチの仕方が違うということです。上野山さんは結構怒ってはって、宮城は体の素晴らしさから自分のことを考えていくようなアプローチ。でも、社会的な視点を持って比較させたりとか健康は自己責任ではなく社会が守っていくものなんだという、そこを切り口に正しいことを考えていくようなアプローチをするのが大阪なんだなと思います。

自分は大阪にいますので、大阪寄りの実践になっていると思いますが、そこらへんの難しさを感じています。今回のコロナの実践中も、宮城の鎌田さん(宮城教育大)のことは頭に置きつつ、やっぱり社会のことをしっかり子どもたちには見抜いてほしいなあと思って、今回もコロナの実践をしました。

日名：

ありがとうございました。10年前の新型インフルエンザ実践と今回の新型コロナ実践では、子どもは違えど反応は似たところがあったというお話からは、学習内容の科学性を感じさせていただいたように思いました。また、大阪らしさと言われても僕自身よく分からないところがあったのですが、窪田さんのお話でなるほどと学ばせていただいたように思います。

健康教育について語っていただきましたので、次は、民舞といえば今、宮本さんかなと思うのですが、別に民舞に限定してはいませんが、宮本さん、いかがでしょうか。

宮本：

自分自身も小さい時に荒馬を踊ったんですが、泉州の馬なしと、それはあかんよなあということまで馬ありでやったのと、さらに、現地やんなあということでやったのと自分の中で三段階あって、でも全国の分科会では体づくりの視点でも取り組まれていたので、まだまだ学ぶことがあるなと感じているところです。

私自身が一番印象的な実践といえば、シュートボールかなと思っています。同志会に入った時に梅山先生がシュートボールをされていて、その後追的な感じで参考にさせてもらいながら離れた三重で一人でやってたなあという思い出があって、自分の中ではシュートボールがすごく面白いなというところが有ります。

最近、秋桜高校の先生に出会った影響がすごく大きいので、体育の授業づくりの大切さも分かるけど、そもそもの子どもとどうやって向き合っていくのかというところが今は大事だと思っています。

日名：

たくさんの方との出会いで、さまざまな分野に興味を広げてこられた様子がよく分かりました。ぜひ、荒馬を追求してください。それでは、お話の中で梅山さんが出ましたので、お願いしていいですか。

梅山：

皆さんのお話を聞きながら思い出していたんですが、千絵ちゃんにも言っていた、泉州大会の次の年に行ったシュートボールが印象に残っています。

というのも、今でこそ分かるんですけど、週一回ブロック委員会があったんですよ。当時は小規模校だったんで、週三回体育館での体育ができたんです。その週の金曜日に「ここまでやりました」とか「こういう目的でします」とか言ったら、渡瀬さんとか中川さん、渡辺さん、船富さんといった主要のメンバーからいろいろ難しい話が出てくるんです。でも、僕、全く分からなくて、基礎技術ってなんやとか、2：0ってなんやねんとか思いながら、僕の目の前でいろいろ意見が飛び交っているんですけど、僕はほったらかされながら話が進んでいくんです。ゆくゆくは大事なことや気づいたんですが、「来週これ頑張るってな。次金曜日集まるで」と言われて、三回やったのを持って行って、「ここあかん」とか「ここはよかった」とか言われながら、次の週も。。と二ヶ月くらい、続けたことが印象に残っています。

こうして時間とっていただいて、皆さんにいろいろご意見いただいたんですが、最初の実践ということもあって、メモとか書いてこうしたらいいなあと思うんですけど、それを形にするとい

うことがなかなかできなくて、振り返ってみれば言われたことをやっているだけで、なかなか子どもを見ようとしていなかったと思う自分がいて、とにかく言われたことをやって終わったんですが、僕の中では消化不良で終わりました。その後三年生で二回やり、五年生でもやったんですが、五年生では、ボールといえばドッジボールというように同志会でいうそれまでの積み上げがなされてこなかったんで、空間の使い方とか分かっていないこの五年生でいきなりバスケットボールするのはちょっと厳しいなと思って、シュートボールをやったんです。そしたら、それにかなり食いついて、ボールの受け取りとかうまくないんですが、「先生もっかいやりたい」と言ったり、女子でボール運動苦手な子が休み時間にドッジボールを始めたり、「シュートボールが一番楽しかった」と言ってくれたのが、高学年でも学習をくぐってなかったら、学ぶ必要があるのかなあと思われました。

失敗した実践としては、今は当たり前のようにペースランニングを体育でやっているんですが、今の学校では同時並行でマラソン大会をやっている、体育でペースランニングを学習しても、マラソン大会になるとペース度外視でスタート同時の全力疾走を目の当たりにして、「ペースランニングの学びってなんやったんやろう」と。なかなか学びが繋がらないなあと思われました。僕が体育主任だったので、「マラソン大会やめましょう」と言って、やめたんです。その代わりにペースランニング学習参観の機会を作ったところです。高学年の子どもたちは過去にマラソン大会を経験しているので、「したいなあ」という意見もちらほらあるんですが、低中学年はペースランニングの学習をしているので、自分なりに気持ちよく走っている姿が各学年からあがってくるので、やってよかったなあと感じているところです。

日名：

シュートボールでの手応えと、せっかく学習したのに大会になったら全部そっちに持っていかれるわという矛盾を感じて変えていかれた中でまた手応えを得られたというお話だったように思います。

それでは、小学校の先生ばかりなので、幼年の井上さんには最後に貴重なお話をいただきたいので、先に笹田さんお願いできますでしょうか。

笹田：

僕は、話すほどの実践がないのですが、二年目で支援担になった時に、重度の自閉症の子どもを担当しまして、初めての支援担ということもあって教材とか指導法とか全く分からず、でもかなり重度な自閉の子だったので、体育の実践どころじゃないなあと思いながら、手探りでやるところからのスタートでした。

でも、同志会で学びながら何ができるかなと模索していたところ、ちょうど跳び箱の授業で、その子が初めて生き生きしたのを目の当たりにしました。そのことも含めてメモや映像で記録をとっていたのですが、障害児体育の分科会が同志会にあることを初めて知って、出会って、そこで簡単な報告をさせてもらったら、「そういう子どもの変化というのは訳がある」とか色々理由を客観的に言ってもらえたのが自分の中ですごく大きかったです。

跳び箱らしい跳び箱ではないんですが、記録をとることで、「子どもにとってこういう意味があったんやな」とか振り返ることができて、子どもから学ばせてもらったなと思っています。

体育とは関係ないかもしれませんが、その時期から並行して中河内でヴィゴツキーの「思考と言語」という難しい本の学習会に参加させてもらっていて、最初は全然分からないまま、難しい言葉にとにかく食らい付いてたんですが、そこでも子どもの変化を毎月報告しているうちに、本に書いてあることと参加者の方に繋げていただいて、そこで、発達について学ぶことの面白さに気づいて、これが同志会のすごいところだなあと、体育でも運動だけじゃなくて、子どもの発達とか認知とかを大切に、実践だけじゃなくて理論も大切にしていることがすごく分かりました。

そこから、思考とか言葉の話へも発展して行って、今度のコロナの実践集では、僕とその自閉症のこの関わりも書かせてもらい、体育だけじゃなくて発達についても理解を深めていけるのが同志会の良さであり今勉強させてもらっているなあと感じているところです。

日名：

なかなか目には見えにくい発達の難しさについて、目の前の子どもの様子と掛け合わせながら学びが深められるよさを実感されているんだなあと、お話を聞かせていただいて思いました。発達研究は同志会内でもまだ一部にとどまっている感じもしますので、これからのこの分野での研究の大切さも広げていただきたいです。

そういう点では、小学校六年間よりも、乳幼児期の六年間の方がものすごい変化があるので、その辺りも触れていただきながら、井上さん、お話いただけますでしょうか。

井上：

実践の話をしながらか、最後に発達の話へ繋げていけたらと思います。

二年目の時に、竹内先生からキャスターボードを支部大会か何かの例会で教えてもらって、それが衝撃的やったんです。

当時二歳児を担当していたんですけど、ロッカーの上に登っちゃうとか、部屋から出ていっちゃうとか、乗ったらあかんとこで三輪車乗っちゃう

とか、そういう大変な子がいるクラスやったんです。その乗ったらあかんとこで三輪車に乗っちゃう姿から、キャスターボードやったらこの子はダメなことをダメと言われんと得意なことを思う存分できるんじゃないかと思って、キャスターボード実践をすることにしました。

私自身もやってみてすごい楽しくて、ちょっと遊んだだけやのにすごい筋肉を使うんやなということも、遊びながら分かりました。子ども達が遊びながらいろんな力をつけられる教材って素敵やなと思って実践を進めると、いろんなところに登っちゃう男の子がすごい落ちていて、困難さがなくなるわけではなかったんですが、楽しいねとか、困った時には困っていると言いに来てくれるようになって、大人と共感関係ができました。

そのまま3歳児に持ち上がったんですけど、そこに大変な子が入園してきて、クラスの三分の一が、何か障害を持っていたり大丈夫かなという子や家庭的な大変さを抱える子だったんですが、楽しいキャスターボードで遊ぶ時はちゃんと私の話を聞いてくれ、生き生き遊ぶ姿があって、どれだけ魅力的な遊びをこちらが用意するかで、一見荒れている大変なクラスというのがガラッと変わるんやなっていうのを実感しました。

そのまま、その子達を5歳まで持ち上がったんですけど、私自身ボールがそんなに好きじゃないし得意でもないんですが、ボール実践をしてみたくてやってみたんですが、やっぱり大失敗したんです。計画をどうたてていいかも分からないし、そもそもボールの面白さを自分自身が分かってないもんやから、何が面白いと子ども達に伝えたらいいか分からなくて、そこで、キャスターボードとボール実践を比べた時に、自分自身が面白いと思えたり、ボール実践するにしてももう少し勉強してからやればよかったなということも思いました。

保育現場で言うと、4歳児は登り棒のような竹登り、5歳児は竹馬とか短い縄跳びで走り縄跳びとか、なんとなく暗黙の了解で決まっている、それはそれで発達には見合っているのだけれど、でもそういう決まりではなくて、縛られずに、目の前の子ども達の姿に合わせて教材って選ばなあかんなんと言うことを、このキャスターボードとボールをやってみて思ったことです。

発達に合っていないことをすると、子ども達は何にも食いつかなくて、ちょっと頑張ればできるようなところのことを大人が掴まないと、保育園の子達ってしたくなかったらしないということができるので、話を聞かずにどこかへいっちゃうんです。でも、子ども達の発達、姿に合っていることをすると、グッと子ども達は集まってくるし、友達の姿が見れるという環境も作れるということを感じています。

また、この間0歳児の研修があって、そこでも「赤ちゃんは赤ちゃんなりに達成感を感じられ

る」ということを聞いて、でも、0歳児は「やったー!」「できた!」と言わないので、そこの達成感をどう大人が感じ取るかということが大切だなと思いました。例えば、滑り台を滑ろうとしている子がいたら、子どもは「滑り台の階段を登りたい」と大人が考えていても、その子は「滑り降りるまでが達成感」だと感じているかもしれない、その見極めを大人がどれだけ子ども理解できるか、それによってその子が、「あ、この先生にやったらいろいろなことを委ねられる」という信頼関係につながる。このような達成感の汲み取りの違いでズレると、「この先生は言っても伝わらない」となって関係も悪くなっていくので、いかにその子の背景とかその子の見ている風景、指さしをしない子はどこ目線でどこを見ているのかという理解のところは、0歳児を担当してすごい大切だと思ったところです。

あとは、お家で言えない子がすごい増えてきていて、どれだけ保育園で「いやいや」を出させるかを考えて接しています。他に、月曜日は荒れることも多いので、そういう心づもりでいること。「今日は荒れてる、朝、お父さんかお母さんに怒られて来たな」とかいうことは少し付き合っていると分かることなので、そういう背景を踏まえながら、日々保育をしています。

日名：

やっぱり、生活丸出しですので、小学校では特に中学年高学年になれば、「先生の言う通りにやらな通知表にも関わるし」みたいな、大人で言えば「給料に関わるから校長にはあまり言わんとこ」みたいな付度の世界が始まりますけれど、そういうことなしに、子ども達にどのように育ちを保障するかという点で、子ども達の姿が無視できないこと、そのためには発達を理解し、発達に見合った達成感をどのように感じているのだろうかという、ここは想像を豊かにしていけないといけないところでしょうけれど、その想像力豊かな保育士、大人には、子ども達はいろんなことをどんどん出してくれる。それが信頼関係になっていき、それがあから豊かな育ちがその先にあるんだというお話だったように思います。

3. 今後、深めたいと考えている研究領域

日名：

これまで話していただいた中にも、「球技が」とかいくつか要望があったと思いますが、今後に視点を移して皆さんからお話いただきたいと思いません。

朝輝：※移動中のため、チャットを代読

新しい教材開発が必要ではないか。これは、全国でも言われていて、いい教材は末長く残り続けるということもあると思いますが、それだけでは

目の前の子どもの姿無視して「これやっておけばいい」ということにもなりかねないですし、そういう意味で、新しい教材の開発が必要だということですね。

それから、支援学級の子ども、特に重度の子どもがいてる中での授業をどのように工夫していくか、そして、その子向けの実践をどのように作っていけるのか。

さらに、大規模校でもできる実践。やはり4クラス以上になると場所の確保が容易ではなくなりまますので、学校全体を巻き込んだ実践作りをどう進めていくのか。合同体育をどううまく利用していけば実践を広げる機会にもなるのか。

日名：

それでは、朝輝さんの提案、要望に関わったお話がある方はおられますか。

梅山：

大規模校、中規模校の話になるんですが、昨年度まで41人の学級を二年連続で担任して、そこで思ったことです。

小規模校（週三時間、注釈日名）と比べて、体育の時間がないんです。週一回外体育、もう一回中体育、以上という感じです。そのことで、習熟度に大きな違いが出ます。ボール運動したとしても、次するのが一週間後なので、前やったことを忘れていくということが多々ありました。いかに習熟させるかが大事になってくるし、だからこそ一時間一時間で子どもに学ばせたい中身を持つとかなないと、多分実践としても薄れていくのではないかなと思います。

僕自身は、昨年度41人の子ども達に、どうしてもリレーの実践がしたくて、五年生でゴーマーク走というのをやったんです。ただ、大勢の子ども達のグループ分けが大変で、十何グループ作って、その数の練習レーンを用意しなくてははいけない。うちのグラウンドはすごく狭くて、直線で5、60mしかとれないんです。幅もあまりない。そこで、体育の時間を、無理矢理五時間目にしてもらって、昼休みや掃除の時間に僕の方でラインを引いたり工夫はしました。でも、それでは全クラスの取り組みが難しくなりますし、いかに準備時間を確保するかも重要なことかなと思いました。

日名：

特に小学校は担任の持つ授業も多岐にわたるので、様々な教科も含めての準備問題を今後取り上げていく必要を感じました。ありがとうございました。

窪田：

さっきの梅山さんの大規模校の話ですが、前勤務校が学年5クラスの大規模校だったので、そこ

から言えることは、体育の授業は難しいから健康教育をするぞ、ということでした。そもそも、雨が降ったら運動場が使えないので、そんな時でも健康教育はいいぞ、という提案です。

日名：

健康教育に精通されている窪田さんらしい提案をいただいたと思います。

それでは、朝輝さんの提案に関連なくお話ありますか。二番目の話で、笹田さんから発達研究といった具合に、色々話されていたとも思いますが。

笹田：

梅山さんの話に関わってですが、マラソン大会の話がありました。子ども達に会っていないのでペースランニングへということによって変えていったのがすごいなと思ったんですが、それを提案した時に、「これが子ども達にとっていいんだ」と言った時の周りの先生の反応はどうだったのかということや、どんな風に変えていったのか、とても個人的に興味があって、なかなか同志会実践って、最初は「無理っ」てなる人があると思うのですが、聞かせていただいているいいですか。

日名：

ありがとうございます。これからやっていきたいことの大きなテーマとして「学校づくり」もありますよね。

梅山：

おそらく、急にというのは難しいと思うんです。

僕は今の勤務校で十年目になりますが、転勤して来た時はペースランニングの授業はありませんでした。僕自身も知らなかったです。そして、マラソン大会に向けた練習が当たり前で、僕もそれが当然と思っていた時期があって、ただ、マラソン大会に近づくにつれてどんどん見学者が増えるんです。なぜか分かりますよね。嫌だからですよ。走りの苦手な子ほど見学に回るんですよ。マラソン大会は大きいグラウンドを借りてするんですが、親も見にきます。そうすると、親に自分がべったになるのを見られる。よくあるのが、最後に走ってきた子に盛大な拍手。あれ、ほんまに子どもがその拍手に後押しされてるのかな、逆にその拍手で追い込んでないかなと疑問に思ったのが、マラソン大会を変えたいなと思った最初のきっかけです。

その時に、たまたまペースランニングの実践に出会って、今まで自分がやってきたマラソン大会への取り組みとは、目的も違えば学ばせる中身も全然違う。そこで自分がペースランニングの授業を実際にやってみて、それをまずは学年に広めたいんです。「こんなあるんですがしませんか」

と。そこでうまくいったから、時期が来る前に他の学年にも話をして、職員室で広めていく作業を2、3年くらいしました。

そうして、大体先生方の中で「ペースランニングってなんやねん」と分かったところで、だけどマラソン大会は残っているので、そのギャップを話しました。その頃には皆さんペースランニングのことを知っているの、そして、職員室の中でも「マラソン大会、ほんまに必要なのかな」という雰囲気、特に年輩の先生からちょこちょこ出ていました。これはチャンスやと思って、「ペースランニングはこんな狙いがあるし、一人ひとりの力を自分自身で高めていくこともできる」という話をして、「こういう点がマラソン大会との違い」だということを保体部の中で上げて、その後運営委員会に上げました。

そうしたら、反対意見はなかったんです。でも、特にお子さんに小学生のいる先生からは「見栄えどうなん」「大会の方が、見ていて盛り上がるんとちゃうか」「そっちの方が面白い」という意見が出ました。

でも、「学校は、外へ向けていい顔したいからやっているのではなく、学校は教育の場で、子ども達にどういう力をつけるかが大事じゃないですか」という話をすると、納得していただきました。

ただ、今でこそ少なくなりましたが、5年生までにマラソン大会を経験している6年生の中の走力が高い子、あるいは上位10位以内に入れば何か買ってもらえると言われている子のご家庭からは、「なんで?」「この子運動しかでけへんに」という声が正直ありました。そんな時は、当時、僕が体育主任だったので、電話変わってもらって、納得いただいたかどうかは分かりませんが、趣旨を説明しました。あとは、僕らの授業の中で子ども達の姿を保護者へ伝えていくことが必要なのかなと思います。

笹田：

ありがとうございます。すごい時間をかけて、周りを変えていかれたのがよく分かりました。前の勤務校では、マラソンの時期に音楽を流してぐるぐるトラックを回っているだけで、何が楽しいんやろうって思うことがありました。またこういう問題は、組み立て体操の問題とも似ているのかなと思いました。去年、組体操が変わるといって、保護者からは「あれは見栄えがいいのに。。。」という声があって、やっぱり子どもの声が一番かなと、子どもの反応がよかったらそれが親にも返って行って、保護者も「そっちがいいな」となれば、それが一番いい形なのかなと思いました。ありがとうございました。

日名：

体育同志会でもこれまで「学校づくり」ということが大切にされて来ていますが、なかなか進ま

ない分野でもありました。今、梅山さんの話にあったように、何年もかけて進んでいくものだと、改めて学ばせていただきました。1年目は自分の学年、そして2年3年かけて他の学年との連携、こういった系統的な指導法の共有による理解の得方、そして保護者への理解の求め方と部会の長としての振る舞い、一つひとつの大切さがよく分かりました。ありがとうございました。

宮本：

私自身、職場で今年が体育研究になったので、こういった学校づくりについて知りたいなと思っていましたところ。

学校づくりをするときに、自分の担任するクラスの状況がままになっていないと発言権がないなど、他にも低学年の担任やってもあまり発言権が弱いというのを感じます。校務分掌で主任を担ったりしないと発言権がない状況をすごく嫌やなと思っていて、自分が2年生を担任してさらに研究主任であっても、全然変わらないんですけれど、6年担任して研究主任もやったらすごくいい感じで事が運んでいくのを感じていて、変えていくためにはそういう担当をしないといけないんだけど、そのような状況になった時にこそ、いろんな先生から要望を聞いて進めていかないと、ほんまの意味で変わらないなと思ってます。

同志会はとてもマイノリティじゃないですか。次の四番目の話題とも関わりますが、とても考えさせられました。

日名：

宮本さん、ありがとうございます。大阪支部としても、こういった同僚性のことがずっと言われ続けながら、先送りになっている部分はあると思います。ますます多忙化の中で、そして子どもの生活環境が一層厳しくなる中で、僕も含めて皆さん、自分のクラスづくりで毎日必死な実態があると思います。そういう背景があって、この分野の足踏み状態があるのでしょうか、そんな中でも一つ大きなヒントをいただいたように思います。

ちょっと一言だけ、そういう中でも使えるのが「学習指導要領」だと思います。「学びのある体育」という点では体育同志会の系統的指導や学び合い（グループ学習）など研究成果がそっくりそのままになってきていますので、権威を上手く使うというのも、この時代に必要なことなのかなと思います。

井上さん、保育現場では小学校と違って、複数でクラスを見られていると思います。そうなるのと、同僚性がかなり直接的なものになっているかと思うのですが、学校づくり、保育園づくりというところで今思われていることがありましたら、お話いただけますか。

井上：

そうですね、私、2年連続で0歳児を担任したんですが、三人担任で9人を見ていたんですが、前は若い方と一つ年上の方と私で担任しました。若い方は私に気を遣い、私は気を遣わずに保育しいやと言うんですが、実際は難しい。それでも、腹割って話すって大事やなと思って、何回か二人で泣きながら話して、最終的にうまくいったという一年やったんです。

その次は、おばちゃん二人の非常勤の先生と組んで、めちゃめちゃ大変やったんです。なかなか私の言うてることが伝わらないし、その先生方もやってきた実績があるので、十も二十も下の私の話、聞いてはくれるんですが、じゃあやってくれるかと言えばやってくれないし、それでもとにかく喋り続けなあかんと言うのは二年連続で思いました。

担任間がうまくいってないと、子どもにすごく影響するのが保育現場で、お家でもお父さんとお母さんが仲悪いと子どもにすごい影響が出るのと一緒で、保育でも担任の先生同士が仲良く笑顔で喋ってたらクラス全体もすごくいい雰囲気になるんです。

去年の保育園状況で言えば、6クラス中2クラスは崩壊状態で、その元が担任間の仲の悪さになってしまっていました。なんとかならんかなと思って、その担任の先生にプライベートで話聞いてみたり、副園長や園長と協力しながら話聞いたんですけど、まあだめでした。

でも、うまくいかんかった二人には、目の前の子どもを大事にせなあかんのちゃうかとか、子どものためにちょっと頑張らなあかんことあるんちゃうか、という話もしてきたんですけど、去年1年間では伝わらなかつたけど、梅山先生が言ってはるように三年を経てやっていったらいいのかなと、今日ここに参加して心が軽くなった気がしています。

日名：

井上さん、ありがとうございます。

クラスづくりでは大体、大きく分けて二種類のアプローチがあるのかなと思うのですが、片や「子ども達が楽しく、関わり合いや話し合いを経てみんないい塩梅にクラスへ収まっていく、クラスができていく」という方法と、片や「教師のピシバシと強い指導で、その結果としてクラスに子ども達が収まっていく」という、どちらも一見、子ども達がクラスに収まっているように見えるんですが、その方法は全くの逆。そういう点での難しさだったんでしょうか。

井上：

私のクラスで言うと、いかに子ども理解してクラス運営をしていくかという話をしたんですが、年輩の先生達はこうしたらうまくいくという

のも分かってはるから、例えば、子どもが「手を洗うの嫌や」と言うてるのにチャチャッと無理矢理させちゃって「はい、ご飯やで」としちやったりと、型に収めちゃう術を知ってはることの難しさを実感しました。

若い先生達は、がむしゃらに頑張ってるから、そういう姿勢をこちらでも学ばなあかんなあと思うのですが、うまくいってなかったクラスでは、そもそも担任同士の考え方が違って、折り合いがつけられなかった感じがありました。

そもそもの子ども理解の視点が違ったと思います。ある子が泣いているとして、一人の先生はいろんな背景を理解して、ただ友達と喧嘩して泣いているんじゃないかと、それこそ前日からこういうことがあったから泣いているのが長引いているんやろうなとか、ちょっとした言葉でも傷ついているんやろうなと理解する先生。もう一人の先生は、泣いていることだけを見て、「いつもより長く泣いてるな。いつまで泣いてるねん。」と言う先生。

こういうそもそもの違いがあるので、最終的にはほとんど話し合わずに保育してはったなという感じでした。子どもにとったらよくないなと思いつながらでしたが。

日名：

なるほど、そういう齟齬って小学校現場でもありますよね。子どもの見えてる部分だけで怒り倒して後のフォローなしということも今までよく目にしてきました。

4. 大阪支部への要望

日名：

それでは、最後のテーマにいきたいと思います。かなり出尽くした気もしますが、先の話も踏まえて、大阪支部への要望を語っていただければと思います。

朝輝：※まだ移動中のため、代読。

年間を通して、支部大会以外でもっと気軽にいろんな人の実践を聞きたい。LGBTをはじめ、性教育の実践。

そして、気軽にいろんな方が参加できるような、30分程度の実践交流会があってもいいと思います。

日名：

支部大会でも、長年の間に自分のポストが決まってしまって、他の領域の学習ができない状況が出てきている中で、去年の11月の豊能三島大会では長年採用されてきた二日完結型分科会から一日完結型分科会へ変更されましたが、支部大会への要望はいかがでしょうか。ブロックで、ちょっと

言いづらかったんだけどここでなら、ということもあればどうぞ。

ないですか。それでは、性教育についてという要望もありましたが、この5年ほどで性教育の本が他組織からたくさん発行されてきているようですが、これについてはいかがでしょうか。

宮本：

同志会の健康教育で「みんどこ」をはじめてやった時と、その後、性教協（「人間と性」教育研究協議会、注釈日名）にいつてから「みんどこ」をやってみた時とで、自分の中で何か違いを感じました。

初めの時もみなさんに言っていたいたんでしようけど、「体を知ろう」とか「みんな大事なな」とか、「自分を知る」という感じだったんですけど、そこで終わっていたなという感じがしました。

「自分も人も大事にできるような人になってほしい」という人権のベースをその後、すごく感じるようになりました。性犯罪の予防という面でも、ちょっと違うなあ最近感じています。

性教協は女性の方が多から、同志会は男の人が多から、そういう部分ももっとみんなで学んだらもっと変わりそうやなと思いました。もっと深いところまでみんなで勉強できたらなと思いました。

日名：

すいません、僕も深さが勉強不足で分かりかねるんですが、今の話を簡単に、整理しちゃったら申し訳ないんですけど、同志会では科学的にという面が強いんですけど、性教協ではちょっと違うぞ、ということでしょうか。

宮本：

そうですね。科学的なこともするんですけど、もっと包括的性教育という括りなので、二次性徴だけとか命の誕生だけとかじゃなくて、貧困も男女差別も全部、SDGsっぽいところも含まれている感じがします。

決定的には、「自分自身を大事にする」ということと「周りの人を大事にする」というところがつながっているなとめっちゃくちゃ思います。「自分のことを大事にするために、嫌なことは嫌と言う」ということも含まれているし、「いつか出会うパートナーのために自分にできることとか相手のためにできること」という視点も実践の中にちょっとずつ入っている感じがあって、自分の30数年の人生を見返した時に、一つひとつの選択を振り返ることもよくあります。生き方がちょっと変わるという感じがしました。

人権的な部分を同志会にも取り入れたら、もっと変わっていきそうな気がしています。

日名：

なるほど、今後研究の幅を広げようという要望としてお話しありがとうございました。性教育に関して、他にご意見よろしいでしょうか。

井上：

今、性教育の話聞いていて、保育園では自己肯定感をどう育てるかということに大事にしている、さっき、千絵ちゃんの話聞いて、「自分が自分であっていいんだ」とか、「自分を大事にできることが、人を大事にできることにつながる」という話は、保育園でも「嫌なものは嫌って言うていいんや」とか「いいものはいい」って言える子ども達を育てて、小学校へ送り出せたらいいなと思いました。

そこで、支部への要望に繋がりますが、小学校への接続という点で、保育現場として何ができるのかということをご最近、すごく考えています。もっと小学校の実践を聞いて、「保育園の子ども達が卒園したらこうなっていくんや」というのをもっと学びたいなと思っています。

ただやっぱり、小学校の先生の実践を聞きに行こうと思ったら、緊張もあって、ただ、この前の支部大会では一日完結型にいただいたので、私もはじめて障害児体育分科会の方に参加させていただいて、こうしてもらいたいところへ行きやすいなと思いました。何年前か、千絵ちゃんの荒馬の実践と幼年の御神楽の実践と一緒に民舞の分科会でさせてもらった時も、すごく刺激があって、「こんな風に保護者にお便りを通して発信してるんや」とか、すごい本気さや熱さを学ばせてもらって、そういう場が持てたらありがたいなと思いました。

日名：

ありがとうございます。なかなか一時はなかった他職交流・連携・接続が、最近はずいぶん支部大会を通したり、新コロナによるオンライン例会によっても進んできている部分があるのかなと思いました。

今後は、関西大学の神谷さんとの関係もあって、中高の先生が増えていくと思われそうです。

ますます、他職交流も活発にして、発達研究を加速させていければなとも、思った次第です。

窪田：

だいたい遡ってしまいましたが、梅山さんのマラソン大会の話をお聞かせいただいて、学校づくりってめちゃくちゃ難しいなあと思いました。

健康教育こそマイナーなジャンルなので一人でやっていることが多いんですが、スマホの実践では学年を巻き込むことができました。その時は保健の先生を巻き込めたり、そういう意味では、自分としては周りを繋げれたということで良かった

と思っています。

でも、梅山さんのように、相当な根回しと「これならいけるよ!」というものを持たないと、流れていってしまうものに立ち向かえないのかなと感じていて、ちょうど運動会の過渡期の中で、うちも今年度から時短になります。じゃあ、何のために時短するのかというと、コロナのためということですが、何の種目するのかというと、団演を減らすとかが出ました。そんな運動会あるのか、という話をしましたが、なかなか自分の中でさらに返せるものがなかったんで、結局時短になってしまいました。

そういう意味では、支部の要望というよりも、体育同志会大阪支部50年の中でたくさんの実践が生み出されて、じゃまじゃまサッカーだったり、全国ならドル平がありますが、これから先、新しい教材・実践というか、キラークンテンツというようなもの、例えば、学力研なら百ます計算とか、性教協ならその研究会名の通りの内容だったり分かりやすいですが、体育同志会だったら体育全般なので範囲が広いけれども、「体育同志会の売りはこれなんです!」というようなものをきちんと出していけるかが、それを職場におろしていけるかどうか全部つながっていくのかなと思います。

それが、例えば支部の財政的な部分の話にもなりますが、関体研（関西体育授業研究会、補足日名）なら組立体操の研修会だけで数年前は400人500人と集まって運営できているんです。でも、僕たちは、例会に50人集まれば万々歳、しかもほとんどが身内やから、これから、若い人だったり土日で勉強する人が増えてこない中で、体育同志会、これからどう50年生き残っていけるのかなと、思います。宮本さんの話にもありましたが、かなりマイナーな集まりですので、教材とか、子どもと一緒に教材を作っていくことに尽きるのかなと、思いました。

あと二つだけ、言わせてください。

いつぞやの支部大会で佐々木さんと話した時に、ちょうど組体がなくなる頃でしたが、同志会として組体が変わるコンテンツってないんですか、作っていかないんですか、ということをお聞きしたんです。佐々木さんは、「それは窪田さんが作って」と返されて終わったんですけど、例えば関体研ならフラッグをしています。この前、牧野さんが退職前のブロック例会で集団マットを提案されていました。いわゆる学校行事のような、全国どこでもやられているようなところに、ハウツーだけではダメだと思いますが、「体育同志会ならこれが提供できます!」みたいな、南中ソーランがそうであるように、そのようなものを考えていかないといけないのかなと思いました。

もう一つは、和歌山での全国大会の後の総括会議で、制野さんが「ここ十何年の実践提案集を読み返した時に、新しい教材を開発している分科会

はほとんどないんだ」という話を出しました。「球技なら追実践が多かったりする中で、新しい実践をどんどん生み出していっているのは、その時は、民舞と健康教育だ」という風に仰っていたのが印象に残っていて、健康教育は自分も含めて、その時の現代的課題に応じた実践をやっていたりとか、いろんなところへ現地に行って踊りを開発してとか、そういう部分は他の教材にもつながる部分なのかなと。他の分科会が別に何もしてないとかではないと思いますが、そういうところにも、今後50年、大阪支部が生き残っていくことに繋がる部分なのかなと思っています。

日名：

新型コロナ以前から、全員ピラミッドの怪我問題で組立体操に制限という流れができていていましたが、このコロナ禍で「接触回避」が言われて、ますます組み合わせることの難しさが出ているところです。

そういう状況はまだ2、3年続くでしょうが、だからこそ、何か新しい教材で「さすが6年生！」というようなものを提案できればいいのかなという時宜に叶った内容でもあるのかなと、お話を聞かせていただきながら思いました。

朝輝：

今の、がっつり実践できる人はやりつつ、その本質は残りながら「ちょっとやってみようかな」という人向けの授業提案もできたらいいかなと思います。なぜなら、体育は教科書がないから、みんな困っている教科だと思うので。

日名：

全国的には、新輝くシリーズが刊行されはじめていて、また叢書の方も水泳はじめ各分野のものがはじめており、少しずつそういう面も準備されつつありますが、大阪においてもそういう面でもアンテナを張っていくことも大事なことです。貴重なご意見、ありがとうございました。

最後、一言ずつ感想をいただいて、この座談会を終わりにしたいと思います。

5. 座談会を終えるにあたって

笹田：

今日はありがとうございました。よく知っている会員の方もいましたが、なんで同志会に出会ったのかということも聞けたので、すごく良かったです。自分についても振り返って話ができ、また、井上さんが仰っておられた接続のことには僕も今、興味があるところなので、発達の勉強をしていると必ず幼年期のことが出てきて、小学校でも遡るとそこが一番大事なんやなと思って、障害児に関わっても発達が遅れているのはやっぱ

り幼年期の時から関係があったりとか、そういう幼年期の実践について、まだ教える程しかお聞きしたことがないので、要望にもなりますが、そこ繋げられたらと思います。

今日は参加できて良かったです。

井上：

今日は参加できて良かったです。ありがとうございました。

小学校の現場のお話がたくさん聞けて、より、保育園で大事にしないといけないことが見えてきたように思いました。発達についても、系統立ててまとめてみたいなと思って、側転一つにしても側転につながる遊びは0歳にとったらどんなことがあるんだろうとか、1歳だったらどんな楽しいことが側転につながるのだろうかとか、ということをもとめたいなという声が幼年の中でも出ていて、何年かかるか分からないですが、教材によって系統立てたものを作っていきたいなと思っています。

もっといっぱい、いろんな実践を聞いて、これから勉強していきたいなとより感じることができました。

宮本：

泉州で最近、子どもの声を聴く大事さを共有していて、その声を聴くためにどうしていったらいいかということがテーマになっていますが、今日お話し聞かせていただいて、学んだりいろんな人からお話聞かせていただくことで、また自分もそういう視点で子どものことが見えてくるんやなという風に思いました。

やっぱりちゃんと会いたいです。リモートやったら、同志会の集まりが減った分、仕事しかせえへんなあと思って、学校の仕事はめっちゃ頑張れたんですが、ある意味で（意識的な、補足日名）実践から遠のいてしまったなと思っています。

梅山：

今日はありがとうございました。少し遅れての参加ですいませんでした。

幼年の井上さんが話してくれた「発達にあつてないとはまらないよ」とか、「ちょっと頑張ったらできるようなことを我々大人が考えなければならぬ」とか、泉州でも支援学校の辻内さんが同じようなことを言われていて、幼年でも同じなんだなと思うことができました。

また、同時に、今の学校が私は最後の10年目の年なので、引き継ぎも含めて何を残していったらいいのかと考えているのですが、さっき朝輝さんから「職場に下すには」という話があったように、私たちも職場の方々の発達にあつてないと、というか職場の実態に応じて、同志会でやっていることを噛み砕いて提供しないと、実践そのもの

を下すと難しいなみたいなことになってしまうと思うので、「これいけそうやなあ」というのを「ここまでやってみませんか」という形で段階に応じて出すことも、我々にとって大事というか、使命だと思います。そして、そこで乗ってきたら、本来の同志会でやっていることも徐々にできてくるんじゃないかなと思うので、手法も大事なんじゃないかなと考えて、今年は頑張ろうと思っています。

朝輝：

どなたもよく知っている方なのですが、じっくり今までのこととかこうやって聞かせていただいて面白かったし、支部への要求といったことは飲み会では言ったりするけど、こうしてきちんと聞いてもらったりとか、自分の実践とかやりたいことはするけど支部への「性教育もっとこうしたい」とか、こういうことをなかなか言うことがなかったの、とても良かったなと思いました。

窪田：

今日はありがとうございました。
いろんな方の意見を聞いていてつくづく思ったのが、自分のところの職場をどうしていくのかということが改めて大切なんだなと思いました。井上さんのところの同僚が苦しんでいた、関係がしんどくなると、子どもにもそのまま返っていくし、いい感じに学校が回っていくと実践も豊かになっていくのかなと思いました。
同志会があることで、そっちでエネルギーをもらって、職場に還元できるという、そういう関係でありたいです。
最近、同志会やってて、しんどいことがきて、しんどさ抱えながら職場に行ってもあ〜ということが時々あったので、いい感じで循環できるようになればいいのかと思いました。
最後になりますが、これは若者座談会ですよ。僕はもう若者ではないと思いますが、若者座談会に入れていただいて、ありがとうございました。最初からずっと思っていました。次は、もっと若いみなさんでこれからの支部のことを語っていったらいいんじゃないかと思いました。

日名：

そうですね。次は、10年後の支部60周年の座談会の司会を、日名から窪田さんがバトンを引き継いでください。その時は、若者と冠をつけなくて、いろんな方から話を聴くのもいいかもしれませんね。5年後か10年後、ぜひよろしくお願ひします。
この座談会も、蓋を開けてみないとどうなるかわからないという不安もありましたが、十分ほど超過してしまいましたが、皆さんにはこの座談会で概ね疲れが癒やされたのかなということも感じさせていただきました。

僕自身が一番、元気をいただいたように思います。貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

それでは、近々、どこかでお会いしましょう。

新年度が始まったばかりです。僕は、「ぼちぼちで頑張ろう」といつも自分を鼓舞していますが、皆さんもそれぞれの言葉で自分を鼓舞していただいたらと思います。

窪田：

最後に、朝輝さん、ご結婚おめでとうございます！

日名：

そうでしたね！おめでとうございます！

それでは、名残惜しいですが、どこかで踏ん切りをつけないといけませんので、みなさん、また元気にお会いしましょう。

